

大学史研究通信

第39号、2004年2月29日(日)

大学史研究会

第39号の内容：大学史の新傾向・留学記・新刊紹介・会員新刊ニュース・大学史研究会第26回研究セミナー報告・大学史研究会2003年度総会報告・大学史研究会2003年度会計報告・事務局からのお知らせ・編集後記・大学史研究会事務局員一覧

大学史の新傾向

大学史の国際会議

中山茂(神奈川大学名誉教授)

国際歴史学会

2000年、オスロにおける第19回国際歴史学会 International Congress of Historical Sciences が行われ、そこで、正規のプログラムになかった大学史のコロキウムが最後の8月10-11日の2日間に約50の報告をもって行われた。これは国際歴史学会からすれば、1つの衛星学会である。これは、私の経験では初めての大きな大学史の国際学会であった。

この国際歴史学会は1900年にパリで開かれ、両大戦間を除いてほぼ5年ごとにヨーロッパの各地で開かれ、戦後には海を渡って、北米大陸でも行われたものである。それが、第1次大戦で分裂したドイツとの和解のために、1922年、ベルグソンを議長としてつくられた国際連盟の知的協力委員会のもとで、組織的にしっかりしたものになったのは1926年である。同じようにして国際科学史学会も1929年、同じ目的で作られた。

歴史学会を Historical Sciences と呼ぶのは、戦前の唯物史観の感覚が入っているものと考えられる。制度としては、日本では日本学術会議の研究連絡委員会が対応しているはずであるが、日本の歴史家をすべて包含するという強い組織にはなっていない。また歴史家はそうした組織に属さなくとも、自分の仕事は出来ると考えている人が多い。

国際連盟の知的協力委員会は今日の ICSU の前身。ICSU は初代会長ヘールで1931年に出来た NGO で、国際学会の調整機関、予算は国連とメンバー国の出資で運営する。日本学術会議はその国別機関である。そのほか専門別機関に歴史、科学史、科学哲学など、ほとんどの既成学会を組織することになっている。

実際にはこの学会は歴史家のなかの国際派の集まりで、歴史の方法論とか、史観を披瀝する、また、「中心と周辺」のような大きな問題を論じる。つまり歴史家が日常行っ

ている細かい厳密な史料操作に煩わされず、大言壮語するところであった。日本からの参加は、すべて西洋史家で、学会で実証的な研究を報告するよりも、教科書を書いたり、史観を述べたり、評論をしたりする人たちで、日本では有名で年配の人が（例、板垣雄三、樺山紘一、西川正雄など、それに人類学の川田順造）奥さん連れで参加している。ただ、報告者はほとんどなかった。あえていえば、山梨大学の史学史の佐藤正幸くらいが、この学会を自分の活躍の場として考えていて、張り切って基調報告をしていた。

私は、旧知のフランスの科学アカデミーの歴史家として知られるソロモン夫人が、おそらく委員会の要請で、国際科学史学会との共同をしようということになって、私が引っ張り出されたのであって、私にとって国際歴史学会への参加は始めてである。（なお、この時の私の報告は、異文化交流の問題のシンポジウムで、13世紀中国の郭守景の観測がLaplaceにいたく評価された理由を考察するもので、ヨーロッパ中心のこの学会では珍しかったのか、10くらいの論文を選んで学会のホームページにレビューされた。）

国際大學史会議

それとは別に、たまたまそこでパークレイの Center for the Studies in Higher Education の所長として、初代所長 の Martin Trow の後を継いだ大学史家 Sheldon Rothblatt にばったり会って、プログラムには出ていなかったが、大学史の分科会がおこなわれることを知ったのである。そこで、大学史の委員会 International Commission for the History of Universities、Commission Internationale pour l'Histoire des Universites にフルに参加しようとしたが、私が急に日本から家族の急病で帰国せよと要請されて、自分の報告をしてからすぐ帰国したので、ついに大学史の会合に全然出られなかった。その後、早島さんからその報告をするように言われても、実際に参加したことがないと、何もいえないので、今年夏パークレイでその時に会った Sheldon やセンターにいる Anne J. MacLachlan にいろいろ聞いたが、要領を得ない。大學史委員会はヨーロッパを中心として組織されていたので、Rothblatt もあまり内情を知っているわけではない。彼らはオルグではなく、たまたま参加を求められただけのことであって、学会の組織や傾向など、まとまったことはいえなかった。そこで、インターネットに現れたものから下記を構成する。

大學史委員会とは、国際歴史学会のなかの一部として大学史の集団があって、それが遅ればせながら、締め切り期日に送れて国際歴史学会に参加した、だからはじめのプログラムに書かれていなかったというのが実情であろう。前回はモンリオールで1995年に行っているが、今回のほうが数倍プログラムは充実している。要するに国際歴史学会の下部機構として大學史の国際 Commission がある。そして国際歴史学会のたびに、分科会を持つことが出来る。その組織が遅れたから、一週間続いた学会の末尾に追加の形で付け加えられたらしい。

プログラムを見ると、最初に全体総会として二つの歓迎の辞がある。ひとつは CIHU の会長、Hilde de Ridder-Symoens 教授である。彼女は Gent に住むオランダ人で、私

は 91-92 年にバークレイのセンターで一緒だった。彼女はヨーロッパの *Rektors* の集まりのプロジェクトとしてヨーロッパ大学史の企画の編集を依頼されていたことは、聞かされていた。彼女の編集になるその成果は 1991 年以来ケンブリッジ大学出版から 4 巻のヨーロッパ大学史として出る予定である。現在のところでは、2 巻しか刊行されていない。もう一人、歓迎の辞を述べたのは、オスロ大学の学長の *Kaare Norum* で、開催大学として形式的な歓迎の辞であった。

ついで、カナダ、モントリオール大学の *Serge Lusginan* 教授による「法王とキングのあいだで：中世フランスにおける大学のメンバーの個人的地位の進化について」、エディンバラ大学の *Robert Anderson* 教授の「フンボルト以前と以後：交代する伝統」、スウェーデンのウメア大学の *Sverker Sorlin* 教授の「なぜ大学史は今日的関心を引くか？：国家と地域のための大学の役割分析について」があった。中世、近代ドイツ大学、現代という 3 つのトピックは大学史の関心を表しているように見える。特に、女性史への関心が強く出てきた。

さてその後は二つの分科会に分かれての個別報告であるが、その分科のタイトルを並べると

1. 中世大学における教授と教師
2. 中世から近代に至る大学、国家、教会
3. 17・18 世紀における新しいチャレンジ
4. 1750-1850；新興大学の形成と移行
5. 研究大学への移行；1850-1930
6. 大学における女性
7. 20 世紀の大学教師
8. 20 世紀における大学モデルとその発展
9. 第二次大戦以後の変容

以上は真ん中くらいまではヨーロッパのグループ、6 以降はアメリカのグループであろう。女性史など、中世大学では女性がいなかったからそもそも存在し得ない。アメリカではじめて現れるのである。

参加者（報告者と司会）の統計を取ると、

- 16：アメリカ
 - 5：アイルランド、デンマーク、ノルウェー
 - 4：イタリア、
 - 3：ベルギー、カナダ
 - 2：イギリス、フィンランド、オランダ、フランス
 - 1：ドイツ、ギリシャ、スペイン、オーストラリア
- となる。

アメリカは一つの独立したグループとして組織されているが、ヨーロッパでは小国の方が大国よりも参加者が多い。つまり、この種の戦前からの伝統を引く汎ヨーロッパ的

学会では、小国は自分の国だけでは学会が成り立たないので、国際学会を発表の機会とするが、ドイツ、イギリス、フランスなどは自分の国の言葉だけで成り立つ学会で発表すればよいから、国際学会を必要としないのであろう。

以上は <http://www.oslo2000.uio.no/univhist/presentation.html> により、それぞれの論文レジュメが読める。

国際歴史学会はこの次には 2005 年にシドニーで行われることになっているが、それと共に大学史のコロキウムを行うことはまだ決まっていない。

実際には、この国際学会は、これまであちこちに散在した大学史研究のグループを一箇所に集めようという意図で、インターネットを通して呼びかけて、集めたもので、それはヨーロッパ諸国とアメリカ（さらにカナダ）を視野に置いたものであるが、日本などその視野の中に入っていないらしい。

モントリオール（1995）と今回のプログラムを見て、感じとしては歴史家のやる大学史（中世から近代まで）のグループとアメリカの教育学くさい大学史または高等教育史で、さらにアメリカのこと、ジェンダーのことをやるグループとの二つの合体野合のように思える。

方法として、新しい要素は何かといわれれば、はっきりしたことは言えないが、この会議の前に、ベルリンでヨーロッパおよびアメリカの研究者を集めて 2010 の「ベルリン大学の創立 200 年祭」を控えて、フンボルト理念の見直しなど、近代ドイツ大学モデルについての共同研究が成り立ちそうである。それは以上で言った二つのグループの結節点にあたるものだから、すべての会員を巻き込めるだろう。

事務局長をやっている Robinson-Hammerstein は宗教改革時代の大学を扱う歴史家で、ダブリンの senior lecturer、彼女によれば、Hilde の大学史、（第 1 巻、中世から宗教改革まで、第 2 巻、フランス革命まで、第 3 巻第二次大戦終結まで、第 4 巻戦後）は第二巻まで出ているが、その傾向はこれまでよりもマトリケルなどから出発して、25 周年とか百周年とかの記念誌を扱う。より社会史的になる。社会に大学がいかに役立ったか、大学を思想史と社会史を結ぶものとして扱う。知識人の産出およびその過剰生産問題も扱う。

さらに、国際歴史学会はより歴史家の問題意識、大学における dissent の歴史で大学紛争までを扱う。中心と周辺の問題：これはヨーロッパとそれ以外との間の diffusion の問題として扱う。大学というのは、やはりヨーロッパの文化的産物でその中心から周囲に以下に影響したかを論じる、ヨーロッパ中心史観からは出ていない。中世大学の前身とも目されるイスラムのマドラサを視野に入れる包容力はない。それに第二次大戦以前に出来た国際学会の常として、ヨーロッパ中心で、言語はフランス語を主とし、英語を従とし、原則としてヨーロッパの都市で行う。

それから、女性史以外に、やはり新傾向といえ、STS や科学史の関心との間に、若い人の間に新傾向が出てきている。私が国際歴史学会に呼ばれたのは、そうした背景があつてのことであらう。

その中心に、Roger L. Geiger というアメリカの大学史家 (Penn. State 所属) がいる。若い人に聞くと、彼は教育史と科学史と両方から推されている人で、1980 年来存在している *History of Higher Education Annual* の編集長をしているが、その未刊の新著 (2004 年春出版予定) *Knowledge and Money : Research Universities and the Paradox of the Marketplace* などは、戦後研究費が大学の中に大量に流れ込むことによって、大学の知的環境が変化していることを、プラス・マイナス両面から分析しようとして、注目を浴びている。彼とはメールを交換しただけで、まだ会っていないが、どうもアメリカ・グループのオルグという位置にいるらしい。

(本稿は、第 26 回研究セミナーの特別講演の内容をまとめたものを、講演者である中山会員より投稿いただきました。)

留学記

グラスゴー留学報告

三宅博

2002 年 10 月より一年間、国際ロータリー財団の奨学金を受けてグラスゴー大学大学院の修士課程に留学致しました。1998 年 3 月に創価大学教育学部を卒業して以来、一般企業に就職しつつも大学史研究に憧れていましたが、ようやく実現の形となりました。

グラスゴーが今回の留学先となったのはロータリー財団からの指定によるものでしたが、グラスゴー大学は私の出身である創価大学と交流協定を結んでおり、毎年数名の学生が留学しているほか、1994 年には創立者の池田大作先生が名誉博士号を授与されており、個人的には馴染みのある大学でした。

私が所属していた History Department では、学部上りの学生のほか主婦や退職者など多様な年齢やバックグラウンドの院生が集まっており、そのため必修のコースでは図書館やアーカイブの使い方といった基礎的な事から、出版社への論文等の売り込み方まで扱うという実践的なものでした。学部を卒業して数年が経過しており、研究の仕方をよく理解していなかった私のような者にとっては、非常に有難い内容でした。大学図書館の膨大な蔵書やアーカイブ資料も大きな魅力でした。また、毎年 6 月に行われる名誉学位記の授与式等、ラテン語を使った昔ながらの式典は大変興味深いものでした。今年はカーネギー基金前議長の Lewis Robertson 卿のほか、8 名が名誉学位記を授与されました。

マスター論文では 19 世紀の後半になってスコットランド大学に導入された入試の影響について、入学者の出自の変化や中等学校の入試対策をもとに分析しました。今後は

19 世紀のスコットランドの大学改革について、より広範に研究を進めて参りたいと考えています。

「大学史研究会」には 2 年半ほど前に入会し、『通信』や『大学史研究』を通じて大変な触発を受けて参りました。本当に有難うございます。今後とも何卒宜しくお願い致します。

新刊紹介

手塚晃・石島利雄共編『CD-ROM 版 幕末明治期海外渡航者人物情報辞典』
(発行：金沢工業大学 製作・発売：雄松堂書店)

荒木康彦 (近畿大学文芸学部)

2003 年 11 月に、「1861-1912 年間の海外渡航者 6,573 名のデータベース」と銘打った上記タイトルの CD-ROM 版の辞典 (ディスク 1 枚) が出された。「序」・「凡例」・「人物情報」・「検索」の構成となっており、「人物情報」をクリックすると、「ID #1 相澤彌吉」から「ID #6573 和辻春治」までの「渡航者一覧」が開き、「一覧」は ID #・姓名 (漢字)・姓名 (よみ)・出生地 (都道府県)・渡航年 (西暦で表記)・生年月日 (西暦年と年号併記)・死亡年月日 (西暦年と年号併記、享年らしき年令が付記) という形になっている。そして、姓名 (漢字) をクリックすると、その人物の詳細画面が表示される。例えば、ID #57「赤星研造」をクリックすると、以下のように表示される。

姓名 (漢字)：赤星研造・姓名 (かな)：あかぼし けんぞう

生没年月日 (享年付記)：1844 (弘化 1) 年～1904 (明治 37) 年 61 才

出身地：福岡県

出身校：武谷祐三に師事

初勤務先／地位：[空欄]

帰国後勤務先／地位：宮内省六等侍医・宮城病院長兼宮城医学校長

留学先：[空欄]

専攻分野：外科学

活動分野：教育；官界 (技術系)

日本で師事した外国人：[空欄]

第 1 回渡航：

渡航時の所属 (派遣) 機関：藩ないし旧藩主

渡航時の地位：その他

渡航先：ドイツ

渡航時期：1866年4月

帰国時期：1873年10月

渡航目的：医学系

渡航形態：公費留学

第2回渡航：

[空欄]

顕著な業績：[空欄]

著書：[空欄]

出典／参考文献：『東京教育史資料体系』第2巻314頁『太政類典』『日本人名大辞典』

6573名の海外渡航者詳細情報がこうした形で分かるだけではなく、「検索」をクリックすると、条件入力画面が表示され「姓名」・「渡航先」・「渡航形態」・「渡航目的」・「出身地（都道府県）」・「フリーワード」で検索が可能で、これらの項目の各々で検索すると、五十音順で「渡航者一覧」が各々表示される。そして、「渡航形態」および「渡航目的」の場合はクリック選択となっており、例えば前者をクリックすると、「公費留学、公費団体視察、公費個人視察、私費留学、私費団体視察、私費個人視察」と出るので、これを選択することになる。この「検索」の場合、残念なことは、先ず第1に「渡航先」が国段階でしか検索出来ず、例えば留学先の大学名で検索までは出来ない点である。第2に「幕末明治期」となっているのに「出身地」が都道府県だけでしか検索出来ず、藩で検索出来ない点であり、これは聊か不便である。

更に、全般的に見れば、6573名と収録者数は多いが、収録漏れの渡航者の数も未だかなり多く、しかも重要人物の収録漏れが目立つ点は看過出来ない。例えば、1867年5月15日に渡航し、1868年10月21日にハイデルベルク大学において学籍登録して、ドイツの大学における最初の日本人学生となった馬島（後に改姓して小松）済治（1849-93）はこの「辞典」には収録漏れとなっており、この辞典が現在の最先端の研究成果を十分吸収しておらず、また一次史料—特に国外のそれ—に殆ど依拠していないことによるであろう。また、収録されている人物のデータが正確ではない点も散見される。例えば、先に挙げた赤星研造の場合、姓名（かな）が「あかほし けんぞう」とされているが、この点もハイデルベルク大学の Matrikel(学籍登録簿)のオリジナルのものと見ると、赤星自身が<Akahoshi Kenzau>（あかほし けんぞう）と記載している。また、渡航時期も1866年4月とされているが、私が発見した一次史料（THE DAILY JAPAN HERALD, No.1, 119, June 13th, 1867. 掲載の PASSENGERS の欄及び YOKOHAMA SHIPPING INTELLIGENCE の欄）によれば1867年6月13日が正しい。そして渡航先もドイツとされているが、赤星達を連れて渡欧したオランダ人医師 Antonius Bauduin の弟で、駐日オランダ領事 Albertus Johannes Bauduin の姉妹宛の手紙（1868年9月7日付け及び1870年1月5日付け）によれば渡航先はオランダであり、赤星は

そこからドイツへ1870年に転じている点が全く見逃されている。これらの点もこの辞典が一次史料に依拠せず、現在の最先端の研究成果を踏まえていないことに由来するものであろう。

上記のような欠点はあるものの、この辞典は「幕末明治期海外渡航者人物情報辞典」としては、先ずは非常に有用であることにはかわりはない。今後、こうした辞典が内外の一次史料に立脚した現在の最先端の研究成果を吸収して、如何に改訂出来るかが大事な点となるであろう。

会 員 新 刊 ニ ュ ー ス

- 1) 有本章編『大学のカリキュラム改革』玉川大学出版部、2003年
- 2) 有本章・山本眞一編『大学改革の現在』（講座「21世紀の大学・高等教育を考える」〈第1巻〉）、東信堂、2003年
- 3) 絹川正吉・館昭編『学士課程教育の改革』（講座「21世紀の大学・高等教育を考える」〈第3巻〉）、東信堂、2004年
- 4) 児玉善仁・別府昭郎・川島啓二編『大学の指導法 ―学生の自己発見のために』東信堂、2004年
- 5) 原清治・山内乾史・杉本均編『教育の比較社会学』学文社、2004年
- 6) 望田幸男『ナチスの国の過去と現在 ―ドイツの鏡に映る日本』新日本出版社、2004年
- 7) 望田幸男・橋本伸也編『ネイションとナショナリズムの教育社会史』（叢書・比較教育社会史）、昭和堂、2004年

「会員新刊ニュース」情報提供のお願い

この欄では、会員の研究活動の紹介を心がけておりますが、編集者の情報のみでは限界があります。新刊を発行されたご本人、あるいは会員が新刊を発行されたという情報を得られた方は、編集担当杉谷までご一報頂ければ幸いです。

大学史研究会第 26 回研究セミナー報告

大学史研究会第 26 回研究セミナーは、2003 年 11 月 22 日（土）・23 日（日）、関西学院大学西宮キャンパス関西学院会館において、34 名の参加者を得て開催されました。

大会プログラムは一日目午後が特別講演、課題研究、総会、懇親会、二日目午前が自由研究という構成でした。

まず一日目冒頭の特別講演では、「大学史の国際会議」のテーマのもと中山茂会員（神奈川大学名誉教授）から、国際歴史学会における大学史分科会の動向についてご紹介いただきました。つづいて「留学の大学史—人の移動と知のトランスファー」というテーマで課題研究がおこなわれました。早島瑛会員（関西学院大学）の趣旨説明のあと、荒木康彦会員（近畿大学）による「日本からドイツへ」向かった三人の初期日本人留学生に関する報告、ならびに井上琢智会員（関西学院大学）による「日本からイギリスへ」向かった留学生の特徴や留学先機関の分布状況などに関する報告があり、全体討議では会員の留学体験談なども交えながら活発に議論がかわされました。課題研究終了後には総会、ならびに懇親会がおこなわれました。

二日目午前は、三会員に以下のテーマでご発表いただきました。(1)土井貴子会員(広島大学・院)「19 世紀末イングランドにおける労働者成人教育の展開—生活協同組合による教育活動と大学拡張運動」、(2)江津和也会員（早稲田大学・院）「大正・昭和戦前期における私立大学予科に関する歴史的考察—多様な形態とその意味をめぐって」、(3)坂本辰朗会員（創価大学）「19 世紀末のボストンにおける女性の高等教育」。

以上の内容で、本年度のセミナーも盛会のうちに無事終了することができました。ご発表・ご参加いただいた会員の皆様に心より御礼申し上げます。また、本セミナーの開催にあたっては、早島先生をはじめ、関西学院大学の諸先生方に格段のご協力を賜りました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。なお、関西学院大学様から本セミナーに対して開催補助金を頂戴いたしておりましたので、ここにご報告させていただきます。

次回、第 27 回研究セミナーは帝京大学八王子キャンパスで開催される予定です（日程未定）。来年度も多くの皆様にご発表、ご参加いただけることを期待しております。

（文責：事務局セミナー担当 福石 賢一）

大学史研究会 2003 年度総会報告

2003 年 11 月 23 日、関西学院大学にて実施された大学史研究セミナーにおいて、大学史研究会総会が開催されましたので、会員のみなさまにご報告いたします。

報告事項

- ・会計報告、予算報告（本号別ページの大川事務局員の報告をご参照ください。）

・編集委員会からの報告

寺崎昌男会員より連絡があり、旧「大学史研究通信」の復刻（日本図書センター）が決定されました。印税は本会にご寄付いただけるということです。

紀要 20 号については原稿が不足しているため、書評などを増やし、21 号は投稿論文のみで編集するか、シンポジウムを企画するかについて現在検討中です。

投稿者が増加したことにより、編集局員の増員が提案され、児玉善仁氏を選出いたしました（任期 2004 年 4 月 1 日より）。また、編集局員の業務負担について討議され、編集委員の任期は 2 年、再選 1 回可能ということが確認されました。この任期については、今後まとめます研究会規約にも盛り込むということも同時に決議されました。さらに、編集委員のバックアップ体制について議論がなされ、特定の個人に負担を与えない、ということで意見がまとめられました。また紀要 20 号が発行された時点で、現編集委員長別府昭郎会員が退任することも確認されました。

・事務局員の交替について

阿曾沼明裕、橋本鉦市両事務局員の退任、杉谷祐美子事務局員の着任が確認されました。また、吉野剛弘会員をあらたに事務局員として迎えることが総会で決定されました。

審議事項

・会計監査について

会計報告にあたっては、事務局会計担当とは別に会計監査を立てることが総会で決定されました。

・来年のセミナー会場について

児玉善仁会員（総会は欠席）からの連絡があり、来年度の大学史研究セミナーに、帝京大学が会場を提供することができるということです。これを受けて、事務局からこの提案を受け入れる方向で児玉会員と連絡を取り、会場及び日程の決定については事務局に一任することを総会で了承いたしました。

・名簿の作成について

長年発行しておりませんでした、本会名簿についてですが、事務局での議論を受け、発行することを決定しました。作成の手順や掲載事項についてですが、最新情報は各会員に葉書で確認をおこない、その際には氏名、所属および原則として住所、電話番号、メールアドレス等の情報を事務局にお知らせいただきます。さらに、名簿記載事項公開の是非については、氏名、所属は名簿記載必須事項といたしますが、それ以外の項目の公開については、各会員の意思を尊重するという方針が確認されました。

・事務局員の任期、任命について

事務局員の任期・任命について明確な規程がありませんでしたので、この点について審議いたしました。事務局に手当てを支給すべき、事務局員は専任講師以上、事務局（および編集委員）の選出方法、選出母体が明示されていない、名簿順で事務局を担当すべき、事務局員の任期は 2 年、などの意見が提出されました。来年度総会に向けて事務局

で議論を重ねたいと思います。

・大学史研究会の規約について

編集委員会投稿編集規程を投稿者が遵守しないという意見があり、原稿の上限を上げ、規程を変更し、会員も規程遵守を徹底する、という決定がなされました（投稿論文は400字詰原稿用紙50枚以内を厳守する）。

・ホームページの内容、更新、およびその担当（アルバイトの採用）

ホームページを更新していないための支障が生じており、早急に対応する、ということで確認いたしました。

（文責：事務局総括担当 進藤修一）

大学史研究会 2003 年度会計報告

2003 年度 会計報告（自 2002 年 11 月 16 日～至 2003 年 11 月 21 日）

収入		支出	
科目	金額	科目	金額
前年度繰越金	¥2,554,503	「大学史研究第 18 号」編集・印刷・発送費	¥514,395
第 25 回セミナー準備金償還	¥100,000	「大学史研究第 19 号」印刷費	¥126,000
年会費・入会金	¥673,770	「大学史研究第 19 号」編集・発送費	¥108,200
「大学史研究」売上金	¥124,030	事務局会議開催経費（旅費）	¥31,650
利息	¥216	編集委員会活動費	¥40,561
寄付金	¥1,000	第 25 回セミナー会場使用費	¥6,300
		第 25 回セミナーの補填金	¥27,221
		印刷費	¥26,856
		通信費	¥154,030
		謝金（アルバイト代）	¥13,000
		消耗品	¥23,962
		送金手数料	¥1,940
		次年度繰越金	¥2,379,404
計	¥3,453,519	計	¥3,453,519

2004 年度 予算案（自 2003 年 11 月 17 日～至 2004 年総会開催前日まで）

収入		支出	
科目	金額	科目	金額
前年度繰越金	¥2,379,404	「大学史研究第 20 号」編集・印刷・発送費	¥300,000
年会費・入会金	¥814,000	「大学史研究第 21 号」編集・印刷・発送費	¥300,000
「大学史研究」売上金	¥150,000	編集委員会活動費	¥50,000
利息	¥200	編集委員会会合費・旅費	¥50,000
		事務局会議経費・旅費	¥50,000
		印刷費	¥25,000
		通信費	¥150,000
		消耗品・諸雑費	¥20,000
		謝金（アルバイト代）	¥20,000
		次年度繰越金	¥2,378,604
計	¥3,343,604	計	¥3,343,604

本予算案は、「大学史研究会 総会（2003 年 11 月 22 日）」にて承認、可決。

大学史研究会 2003 年度会計についての概略を報告いたします。

(収入)

2002 年度会計からの繰越金は 2,554,503 円でした。2003 年度年会費は 106 名の会員より納入があり（全会員の約 70%）、年会費・入会金の収入額は 673,770 円でした。ただし、2002 年度納入額に比べ約 10 万円の減少です。年会費未納の会員は、納入にご協力をお願い申し上げます。「大学史研究」（紀要）は、編集委員会のご尽力によって 124,030 円の「売り上げ」を計上しました。これは、2002 年度の倍額以上です。

前年度繰越金を除いた 2003 年度の「実収入額」は 899,016 円でした。

(支出)

2003 年度は「大学史研究」の刊行が 2 回行われ、その編集・印刷・発送に 748,595 円を支出しました。第 18 号では編集・印刷・発送を一社の業者に依頼しましたが、第 19 号では「印刷」と「編集・発送」を二社の業者に分けて発注しました。これにより、第 19 号では刊行経費の軽減が実現できました。編集委員会の適切なご判断・ご措置に感謝いたします。なお、両号刊行経費の相違は、各号総頁数の多寡にも起因しています。

2003 年度の実質的な支出は 1,074,115 円であり、2004 年度への繰越金は 2,378,604 円となりました。

2004 年度の予算案について

大学史研究会では、次年度の予算案について、まず事務局が基本案を作成し、これを総会に提示し、そこでの審議を経て、最終決定をいたします。2004 年度予算もこの手順にしたがって基本案が編成され、総会審議を経て予算案が決定しました。

「収入」につきまして、大学史研究会の運営経費は年会費の納入に依存しております。研究会の発展と円滑な運営のために、各位なにとぞご理解ご協力のほどお願いいたします。2004 年度会費の納入は、4 月以降に納入依頼通知・振込み票を発送いたしますので、それ以降にご協力いただくことになります。

「支出」にあつて、「大学史研究」の刊行を 2 回とし、これに関わる編集・印刷・発送費を各号 30 万円といたしました。2005 年度への繰越金は 2,378,604 円と「例年並」の金額維持を予定します。

なお、年度中に「大学史研究会の発展のため」あるいは「会員サービスのため」に必要な経費支出の要請があった場合、事務局でこれを検討し、妥当性をもってそれが適当と判断しうるならば、この支出は認められることが、総会にて提案・承認されました。

これにあたり、予算の有効活用にむけて、今後とも会員各位からのご提案、ご教示を歓迎いたします。

以上、「2003年度会計報告」及び「2004年度予算案」につきまして、ご質問、ご提案等ございましたら、事務局までご連絡よろしくお願ひいたします。

(文責：事務局会計担当 大川一毅)

事務局からのお知らせ

退会者の報告

以下の会員の方が退会されました。長い間本会の活動にご協力賜りまして、誠にありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

退会者： 田中征男 会員 ・ 為政雅代 会員

原稿募集

『大学史研究通信』第40号は2004年3月31日に発行予定です。会員諸氏の現在の研究紹介、文献案内、会員主催の行事のお知らせなど、どのようなものでも結構です。皆様からの投稿を心よりお待ちしております。原稿提出・お問い合わせ等は『通信』編集担当の杉谷までお願ひいたします。

住所・所属変更届のお願ひ

住所や所属（昇任・学位取得も含む）に変更のある会員は事務局進藤までご一報くださるようお願ひいたします。教授・研究のために海外にご滞在予定のかたも、海外での連絡先をお教えいただけましたら幸いです。ご連絡は最終ページにございます、進藤研究室宛にお願ひいたします。

『大学史研究通信』バックナンバー希望者に頒布いたします

『大学史研究通信』第14号～現在発行号まで希望者に頒布いたします。80円×部数＋郵送料（1部の場合90円、2部以上は120円）分の切手を同封の上、編集担当杉谷宛までご請求ください。ご連絡は最終ページをご覧ください。

編集後記

今回の『通信』は研究セミナーの報告をお送りする関係から、予定よりも大幅に遅れて発行いたしました。充実した紙面構成とはなりませんでしたものの、発行の遅れによって会員のみなさまにご迷惑をお掛けしましたことを深くお詫び申し上げます。

みなさまのご協力により、セミナーも無事、盛況のうちに終えることができました。この場を借りまして、厚く御礼申し上げます。

このたび、喜ばしいことに、また新たに吉野剛弘会員を事務局にお迎えすることができました。総会においても、多くの事項が審議されましたように、会の体制も検討されており、新風がもたらされつつあるなか、会のより一層の発展のために、会員のみなさまのますますのご協力を心からお願い申し上げます。

(杉谷祐美子記)

『通信』編集は事務局・杉谷祐美子が担当しております。

連絡先 (E-MAIL) suguy1@ss.ij4u.or.jp

※上記アドレスの「1」は数字ですので、ご注意ください。

なお、E-MAIL 以外による御連絡は、下記までお願いいたします。

連絡先 〒562-8558 大阪外国語大学外国語学部 進藤 修一研究室内

TEL / FAX 072-730-5355

E-MAIL sshindo@post01.osaka-gaidai.ac.jp

sshindo@jnb.odn.ne.jp

『大学史研究通信』第40号は、2004年3月31日発行予定です。

大学史研究会事務局

〒562-8558 大阪府箕面市粟生間谷東 8-1-1

大阪外国語大学外国語学部 進藤 修一研究室内 大学史研究会

TEL / FAX 0727-30-5355 EMAIL sshindo@post01.osaka-gaidai.ac.jp

大学史研究会事務局員 (五十音順)

大川 一毅 (早稲田大学)

進藤 修一 (大阪外国語大学)

杉谷 祐美子 (早稲田大学)

福石 賢一 (九州女子大学)

吉野 剛弘 (鹿児島女子短期大学)

吉村 日出東 (明治大学)